

## 大胆に変化を求めて

スワプナ・マジウムダール (インド)

インドのビハール州、東チャンパラン県パタヒ地区の住民は、アニタ・ラクラを見ると安心します。雨であろうと晴れであろうと、補助看護助産師 (ANM) のアニタが彼らのためにやって来ることを知っているのです。変わりやすい天候や、毎日越えなくてはならない険しく困難な山道に立ち向かうだけではなく、ナクサル (インド共産党毛沢東主義) さえ恐れずにアニタはこのコミュニティにやってきます。ここは国内紛争地であるため、学校の教師や政府職員、さらには学生でさえも、ナクサルに出くわすのを恐れて自宅から出ようとしません。しかしアニタは一度も仕事を休んだことがありません。アニタは毎日午前 8 時に自転車で出勤し、彼女の部署が担当する 8 つのアンガンワディ・センター (インドの農村部の育児センター) を訪れ、妊婦に破傷風の予防注射や鉄分の錠剤等を処方しています。また、健康を維持するための情報やアドバイスを与え、子供たちには予防接種を受けさせます。

コミュニティの誰もがこの 42 歳の部族の保健師を知っているように、アニタもまたほとんどすべての家族を知っています。そのため、夜遅くに緊急の呼び出しを受けても躊躇なく対応します。命を救ってくれるという彼女の評判のためか、これまで彼女がナクサルに阻止されたり脅かされたりしたことはありません。このコミュニティでの彼女の人気はとても高く、以前彼女が昇進で別地域のプライマリヘルスセンターに異動になった時には、100 人を超える住民が彼女の異動の取り消しを求めて当局に手紙を書いたほどです。そのような要求が行われたのは初めてのことでした。そしてコミュニティにとって幸運なことに、アニタの異動は取り止めになったのです。

しかし、最初からこうではありませんでした。アニタが補助看護助産師として働き始めた当初は、コミュニティからの反発もありました。仕事を理解し、コミュニティの信頼を得るには時間もかかりました。また、毎日の報告を行うヘルスセンターは彼女の自宅から 12 キロも離れており、8 つのアンガンワディ・センターもそれぞれが 2~3 キロ離れているため、自転車の乗り方も学ばなければなりませんでした。

アニタはまた妊婦への注射や点滴、止血方法なども学びました。赤ちゃんへの人工呼吸による蘇生をしたこともあります。救命に対する彼女の献身的な姿勢により、彼女はいまや村の英雄です。以前は自宅分娩を補佐してきましたが、今は医療施設での分娩を奨励しています。しかし、医者がいない場合や緊急の場合は、アニタが自宅分娩を支援します。妊婦が彼女を頼りにしているのもこのためです。実際、この地域の電力供給は不安定で、以前、緊急事態の際に彼女が懐中電灯だけで母子の命を救えたのはアニタの専門知識のおかげでした。

アニタが慎重に対応している課題の 1 つに家族計画についての意識の向上があります。女性が自分の体についての決定権を持たない状態では、避妊や家族計画を女性にアドバイスすることは困難ですが、アニタはうまく戦略を使っています。彼女は、妊婦に鉄分が豊富で栄養価の高い食物を摂るようアドバイスし、赤ちゃんが健康で安全な分娩ができるようにしています。そうすれば、新生児や乳児の死亡率が減少し、家族がより多くの子供をつくる必要がなく

なると伝えているのです。アニタは、少人数で健康な家庭を持つことの利点を説明し、経口避妊薬を配布します。今はまだ家族の規模は大きいものの、家族計画に対する意識が高まっている、と彼女は言います。

また、母子保健デーにアンガンワディ・センターでこのようなメッセージを繰り返し伝えていることも功を奏していると言います。母子保健デーに妊婦や子供たちがアンガンワディ・センターを訪れた時、彼女はワクチンを投与し、赤ちゃんの体重を測り、簡単な疾病の治療を行いながら彼らの健康について話をします。今では、女性が自身の性やリプロダクティブヘルスについて率直に話すことを恥ずかしくないようになりました。

様々な研修に参加してスキルを向上させたアニタは、現在、十分な収入を得られるようになり、自分の自転車とスクーターを購入しました。彼女は農村保健に変化をもたらした立役者であり、コミュニティの女性や女兒を励まし続ける存在となっています。



補助看護助産師アニタに感謝する健康な子供たちと幸せな母